九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

討論

長谷, 千代子
日本学術振興会

https://doi.org/10.15017/2340972

出版情報：九州人類学会報. 30, pp.118-118, 2003-07-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

討　　論

討論では、片岡氏および池田先生から各発表者に対して、現在進めている調査の中で、「宗教」についてどのような感触を持っているかという重要な質問があった。これに対して金縄はモソ人のケースに関しては長谷による徳宏タイ族の事例ほど、現在の母系制や宗教に対して国の規制がかかっているようには思えないが、宗教がモソ人の母系制集団としての凝集性に大きな役割を果たしている可能性があると述べた。一方王は、シャーマニズムを無理やり宗教に分類することによってかえってその実態がつかみにくくなるという点を指摘し、漢字の「宗」の字にこめられた祖先祭祀という意味こそ漢文化の文脈における宗教であり、研究者もいたずらに外来の宗教概念を用いずに現地の視点をとることが必要であると述べた。長谷は宗教を研究する側自身の宗教概念を自覚すべきだとし、宗教とは人生を生きるに値すると信じるために必要なフィクションとそれを現実化する手法であると暫定的に定義して、徳宏タイ族の財神崇拝も、党の管理下に置かれている上座仏教も等しく「宗教」とみなすという立場をとった。

しかし議論はこのあと生産的な方向に向かったとは言いがたい。セミナー終了後に参加者の一人から、このセッションは「中国・台湾における宗教と近代化」というテーマにすべきだったという助言をいただいたが、それはあたっていると思われる。このセッションの課題はあくまで現代中国・台湾における宗教状況を問題にしようとしたもので、実際打ち合わせの段階ではその方向の議論も出ていたのである。にもかかわらず、実際のセッションでは発表者各自の宗教観を表明することに時間をとられ、近代中国において宗教現象をどのように研究すべきかという方法論の議論にたどり着けなかったのは、発表者同士で問題意識が充分に共有できていなかったことが大きな障害になったと思われる。今後はこのセッションを縁に知り合った中華圏関係の多くの若手研究者との交流のなかでこの議論の続きができればと考えている。

（文責：長谷千代子）